

## 平曲譜本の濁点注記：尾崎家本平家正節と青洲文庫本平家正節（3）

著者	奥村 和子
引用	言語文化学研究. 日本語日本文学編. 9, p.1-10
URL	<a href="http://doi.org/10.24729/00002582">http://doi.org/10.24729/00002582</a>

# 平曲譜本の濁点注記

## —尾崎家本平家正節と青洲文庫本平家正節 (3)—

奥村和子

### 1. はじめに

いわゆる平曲譜本における豊富な発音注記の価値は周知のものであろう。積極的にその音が清音であることを表す「スム」注記と同様に、積極的に濁音であることを表す濁点は、数が多く、音訓問わず漢字にも付されている貴重な発音注記と考えられるが、あまり詳細に言及されることがない。すべての濁音に濁点が付いているわけではないのであるから、「どのような濁音に濁点を付すのか」、「どのような場合に濁点を省略するのか」といった傾向性を明らかにしておく必要がある。それは当時の音韻を明らかにする上でも役立つはずである。『尾崎家本平家正節』（以下、『尾崎本』）と『青洲文庫本平家正節』（以下、『青洲本』）との濁点注記については、以前に巻一における調査結果の報告を行った<sup>1)</sup>が、このような注記は、冒頭部分で詳しく、後になるにつれ簡略化され、既出語には付かなくなることも考えられる。そこで、本稿では、巻二での調査結果を巻一と比較することにより、その共通点と相違点とを見ることとする。

また、本文や墨譜がほぼ同じである尾崎本と青洲本とは、本文の類似に反して発音注記にかなりの相違が見られるため、その2本の比較を行っておく必要性についても、前稿に述べた如くである。以下、平曲譜本の濁点について巻二の調査結果の整理と巻一との比較報告を行う。

### 2. 調査

尾崎本と青洲本において、それぞれの巻二上下の本文に付された濁点をすべて抜き出し、その濁点の付された文字が「仮名」「振り仮名（捨て仮名を含む）」「漢字」のいずれであるかによって分類すると、次のようである。（ ）内には巻一の数値を示す。

	尾崎本	青洲本
仮名	694 (704)	896 (836)
振り仮名	24 (25)	139 (304)
漢字	59 (175)	373 (524)
合計	777 (904)	1408 (1664)

巻一との比較で見ると、両本の漢字、及び青洲本の振り仮名においてかなり濁点の数が減少していることが目立つ。それ以外については巻一とさほど変わらない数値であり、全体的に青洲本において濁点が多く見られることも巻一と同様である。以下、その付され方を順に見ていくこととする。

### 3. 結果と分析

#### 3-1. 仮名に付された濁点

上に示した如く、尾崎本、青洲本ともに最も多いのが仮名に付された濁点である。ここで、逆に巻二上下から「濁音で発音された可能性のある文字に濁点が付いていない」例を拾い上げると、次のようである<sup>2)</sup>。

尾崎本 262例（助詞129例、助動詞40例、動詞45例他）

青洲本 47例（助詞28例、助動詞4例、動詞6例他）

濁点の付く仮名が少ない分、尾崎本に濁点の付かない仮名が多く見られるが、巻一との比較では青洲本で濁点の付かなくなる例の増加が目立つ<sup>3)</sup>。

##### 3-1-1. 尾崎本

尾崎本で仮名に濁点の付いた例、付かない例を品詞別に分け、主要な品詞についてみると以下のようなになる。

	総数	助詞	助動詞	動詞	名詞
濁点有	694	374	115	117	44
濁点無	262	129	40	45	18
合計	956	503	155	162	62

数の多寡はあるものの、濁点の付く割合を算出すると総数73%、助詞74%、助動詞74%、動詞72%、名詞71%となっており、品詞による偏りがほとんどない。しかし満遍なく同じ割合で付くわけではなく、語による差は見られる。最も用例

が多く、かつ同じ語が繰り返し出現する助詞について見ると、主要な語における濁点の有無は次のようである（濁点無の例の多いものを順に挙げた）。

	ば	が	ども	まで	をば	ぞ	で(て) <sup>4)</sup>
濁点有	69	69	44	7	18	110	9
濁点無	62	17	11	8	8	6	3

「ば」は濁点の付くものと付かないものとがほぼ半数ずつであるのに対し、「ぞ」は用例のほとんどに濁点が付く等、語による偏りは著しい。用例数の関係でここには掲出していないが、「ながら」「だに」「づつ」等はすべてに濁点が付されていた（順に9、4、2例）。

「ば」に濁点の付かないものが多い、「ぞ」はほとんどの場合に濁点が付く、といった傾向は巻一と同じである。いずれも清音か濁音かで意味の分かれる助詞であるが上接語によりある程度の判別がつく、という点では共通している。異なる点といえば「ぞ」がもともとは清音出自であったと考えられることであるが、中古には既に濁音化していたとされており、これが「ば」と「ぞ」の濁点の有無に影響しているとも考えづらい。尾崎本（巻一、二）の特徴として、「ば」には濁点の付かないものが多く現れるが、「ぞ」にはそれがかなり少ない、ということ指摘するにとどめる。なお、「ば」を除くと、助詞に濁点の付される割合は82%まで上がることになる。

その他、ガバマ行四段動詞連用形に接続する「て」の場合、上接動詞が音便を起こすと「で」になるわけだが、これについて濁点の有無を見ると次のようである（濁点の有無が問題となる文字の前を▽印で示す）。

濁点有 及ん▽で／つい▽で（2例）／次▽で／ない▽で（難く）

／ぬい▽で／挟ん▽で／結ん▽で／読▽で

濁点無 及ん▽て／くん▽て／組▽て

このうち、表記からはその動詞が音便形であるか否かを判断できない例、すなわち、動詞の語尾が表記されていないものは「次で」「読で」「組で」の3例である。しかして、この部分は日本古典文学大系本『平家物語』（以下、『大系本』）ではそれぞれ仮名書きで「ついで」「ようで」「くみて」となっており、その音便の有無（と、それに連動して起こる「て」の濁音化の有無）がこの尾崎本における濁点の有無と一致する。とすれば、このような例での濁点の有無は、語尾が表記されない動詞の音便の判定にも役立つ可能性を考え得る。用例を集めての検討を課題としておく。

### 3-1-2. 青洲本

青洲本については3-1で述べた如く、濁音を表わすと思われる仮名に濁点の付かない例が47例あって、尾崎本に比べると少ないが、青洲本巻一からはかなり増えているように見える。ただし「濁音と表すと思われる仮名」という判定自体がかなり揺れるものであるので、いくつかの例を詳しく見ていく。

	総数	助詞	助動詞	動詞	名詞
濁点有	896	468	150	157	49
濁点無	47	28	4	6	6
合計	943	496	154	163	55

まず品詞別に濁点の付く割合を算出すると、総数95%、助詞94%、助動詞97%、動詞96%、名詞89%となり、品詞による偏りは多少あるものの、ほぼ9割強の濁音に濁点が付されていることになる。

この中で濁点無の割合が若干高い名詞について、その用例を見ると以下のようである。

- ①しろ▽かね ②たそ▽かれ ③つづけ▽さま ④はかり▽こと  
⑤夕▽され ⑥し▽け簾

⑥の「しけ簾（重簾）」以外は、もともと清音であったものが後に（主に連濁によって）濁音化した、と考えられる部分であり、①～④については尾崎本・大系本ともに濁点が付けられていない。この4例についてはそもそも「濁音である箇所に濁点が付かなかった」のではなく、濁音ではなかった、と判断する方が妥当のようである。⑤も青洲本では清音と捉えていた可能性があり、濁音に濁点のない例と言えるのは⑥のみということになる。濁音の仮名にはほぼ濁点を付す、という青洲本の方針は巻一からさほど変わっていないとも考えられる。

次に、用例数の多い助詞について主な語を次に挙げる。

	ば	ぞ	が	ども	をば	で(て)
濁点有	135	113	77	54	15	10
濁点無	2	3	9	2	5	2

「が」「をば」「で(て)」に濁点無の例が若干高い割合で見られるが、やはり全体的に数は少ない。このうち「で(て)」については、尾崎本と同様、実際に清音であった可能性をまず考えることになるが、その用例はいずれも上接動詞が

音便化していることがはっきりしている箇所であって、濁点を省略したものと考えるほうが妥当のようである。

濁点有 及ん▽で／組ん▽で (2例)／つい▽で (2例)／次イ▽で／  
ない▽で／ぬい▽で／挟ん▽で／読う▽で

濁点無 及ん▽て／結ん▽て

「及んで (巻二上鶴九)」「及んで (巻二上鶴十六)」については初出のものに濁点を付して後で省略した、ということが考えられようか。

また、「が」に濁点が付かない例は以下の通りである。

家房▽か子／臣▽か子／己▽かつばさ／雑色▽か首／臣▽か子／  
清盛▽か花族／為嗣▽か末葉／我等▽か今召帰さるる／  
給ひし▽か (尾崎本では濁点有、青洲本ではスム注記)

ほとんどが「名詞+が+名詞」の例であって、濁点がなくとも文脈から判断できそうな箇所ではあるが、青洲本でこのように濁点の付かない例が目立つ語は珍しい。

### 3-2. 振り仮名に付された濁点

「2. 調査」で示した如く尾崎本に比して青洲本では極端に多いが、これは漢字の振り仮名そのものが青洲本に多いことを示すものである。ただ、巻一と比較すると特に青洲本においてかなり濁点の数は減少している。

また逆に、濁点の付かない例は、巻一上において両本ともに極端に少なく、「読みを示す目的で付された振り仮名における濁音にはほぼ漏れなく濁点が付される」と述べたのであるが、巻二上下においては濁点の付かない例が少し目立つようになる<sup>5)</sup>。特に振り仮名の多い青洲本では、

泪ミ▽タ (上・足摺二十三) …泪ナミ▽ダ (下・敦盛最期十)

下▽タられ (下・青山一) …下▽ダし (下・青山九)

過▽キて (下・横笛四) …過▽ギぬ (下・泊瀬六代四)

出▽タす (上・足摺十八) …出▽ダひて (下・横笛十五)

等、同じ語の振り仮名に濁点が付いたり付かなかったりする例も見受けられる。3-1-2で述べた音便のように、「先に出現した箇所に濁点を付し、同じ語が後出した場合に濁点を省略する方針」なども考えられるが、上に挙げた例はいずれも濁点を付す例が後ろに出てくるものであって、ここではそういうことも言えないようである。濁点のつかない助詞が目立つようになる仮名と同様、振り仮名においても巻二では青洲本の濁点の付け方にやや揺れが見られるようになると言えようか。

### 3-3. 漢字に付された濁点（音読み）

漢字に付された濁点は、音訓や呉音漢音等、様々な可能性のある読みをある程度確定する上ではもちろん、漢字に隠れてわかりづらい連濁の様相をうかがい知ることのできる貴重な資料である。

まず、尾崎本、青洲本のそれぞれについて、巻二の上下から濁点の付いた漢字の用例数を、その読みの音訓によって分けると次のようである。

譜本	音読み	訓読み	合計
尾崎本	43	16	59
青洲本	249	124	373

#### 3-3-1. 尾崎本

尾崎本の音読みの漢字について、濁点の付いている漢字を語頭、語中の順に挙げる。

【語頭】 御、上、大、地

【語中】 歌、下、賢、驗、玄、山、所、賞、上、人、性、前、増、躰、代、内、千、知、中、箔、母、方、々（宿）

語頭で濁点の付く漢字は「上（ジョウ・ショウ）」「大（ダイ・タイ）」「地（ヂ・チ）」等、主として呉音と漢音とで清濁の両方の読みが可能な文字である。「御」は呉音漢音ともに濁音だが、訓読みの清音とで読みを迷う漢字の典型例と言って良い。

語中では、語頭と同様に両方の読みが可能なもの他に、「歌（唱歌）」「山（商山）」「所（本所）」「賞（勸賞）」「性（天性）」「千（当千）」「躰（御正躰）」「知（善知識）」「方（両方）」等、連濁の標示となっているものがある。これに対してあらかじめ濁音であることがはっきりしている漢字に濁点が付いた例は見られず、語頭語中ともに「（音と訓・呉音と漢音・連濁の有無など）いくつかの読みの可能性があるものについて読みを指示した」ものが大半を占めることになる。

濁点の付かない漢字は膨大な数になるため用例を省くが、数字・日付・元号（「五」「十」「三月」「平治」等）、人名・地名（「文覚」「遠藤」「鳥羽」「次郎」「丹左衛門」等）、官職・立場（「太政大臣」「大將軍」「左大臣」「中納言」「中將」「中宮」「入道」「判官」等）などを表す語が目立っており、この傾向は巻一と共通するところが多い。

### 3-3-2. 青洲本

【語頭】逆、行、具、下、駿、御、雑、讒、重、上、正、仁、陣、善、大、壇、地、同、撥、美、鬢、武、奉、便、坊

【語中】歌、峨、加、月、巖、顔、行、形、具、下、化、芸、賢、駿、見、玄、言、弦、後、固、御、剛、国、座、在、山、参、子、司、寺、事、字、時、者、手、從、宿、々(宿)、旬、所、性、賞、生、上、城、杖、常、淨、人、神、臣、陣、誦、宣、錢、前、増、三、太、体、内、大、提、定、道、端、知、中、地、殿、度、々(度)、藤、同、等、特、法、箔、撥、美、平、覆、兵、便、夫、武、負、物、仏、弁、母、方、貌

青洲本でも語頭で濁点の付く漢字は清音濁音両様の読みを持つものがほとんどであるが、尾崎本のそれと比べると、さほど清濁で迷わない語(「逆反」「讒言」「陣」「善知識」「壇ノ浦」「坊」等)に付けられていることも多いようである。

語中についても同様で、「峨(嵯峨)」「宜(便宜)」「芸(武芸)」「言(狂言)」「剛(金剛)」「事(一事)」「時(当時)」「常(非常)」「陣(先陣)」「便(穩便)」等の例は濁点がなくとも読む上であまり問題がないように思われる。濁点により連濁を示していると考えられるものには、尾崎本と重なる例の他に「者(道心者)」「宣(院宣)」「等(郎等)」「兵(軍兵)」などがある。

一方、濁点の付されない用例についての傾向は尾崎本とほぼ共通しており、その用例数は巻一に比べてかなり多くなっているようである<sup>6)</sup>。

## 3-4. 漢字に付された濁点(訓読み)

### 3-4-1. 尾崎本

【語頭】用例ナシ

【語中1】紙、闇(くらき)、黒、子、坂、々(醒・さめ)、田、立(たち)、魂、津、手、戸、原、姫、袋

【語中2】侍(さ▽ぶらへ)

濁点成立の状況を考えても当然のことであろうが、語頭濁音の例が見られないことも含め、訓読みの漢字については、音読みの場合よりも濁点の付される用例がかなり少ない。

語中1(連濁による後部成素語頭の濁音「つら▽魂」等)と語中2(語中にもとから存在する濁音「頓(や▽がて)」等)とを比較すると、濁点が付くのはほとんどが語中1、濁点が付かないのは圧倒的に語中2である、という傾向は巻一と共通している。尾崎本における訓読みの漢字に濁点が付くのは、ほぼ連濁による場合と行うことができそうである。語中2に濁点が付くのは、「さぶらふ・さ



うらふ」のように『平家物語』において清音と濁音とで使い分けがある等の特殊な事情の語に限られる。

### 3-4-2. 青洲本

【語頭（助詞）】ヶ（が）、共（ども）、斗（ばかり）

【語中1】方（かた）、形（かた）、川、紙、君、切（きり）、口、熊、曇（くもり）、闇（くらき）、黒、毛、子、事、籠（こめ）、比（ころ）、坂、指（さす）、里、侍（さぶらひ）、実（さね）、澄（すみ）、摺（すり）、染（そめ）、田、高（たかき）、嶽（たけ）、達、立、魂、父、津、司（つかさ）、作（つくり）、付（つけ）伝（つたひ、つて）、手、寺、戸、時、殿、鳥、挟（はさんで）、箱、原、直垂（ひたたれ）、人、姫、笛、船、縁（へり）、穂、々（こゑ、さま、ひと）

【語中2】葛（かづら）、侍（さぶらひ）、侍（さぶらふ）、場（ば）、辺（べ）、守る（まぼる）、路（じ）

「語中1に比べて語中2に濁点の付く用例が少ない」という点では青洲本も尾崎本と共通する傾向を持つが、やはり用例数は全体的に青洲本の方が多い。

語中2の用例について見ると、「さぶらひ・さむらひ」「まぼる・まもる」等、マ行音とバ行音の読み分けにかかわる箇所での濁点がいくつか見られ、注目される。青洲本の巻一において「煙（けぶり・けむり）」「蒙る（かうぶる・かうむる）」等の例に濁点がなく、「蒙る」に「ム」という捨て仮名があり、「こうむる」と読んでいたものと考えられたのとは逆であり、語ごとの詳細を課題としたい。

## 4. おわりに

以上、『尾崎家本平家正節』及び『青洲文庫本平家正節』両本について、その巻二の濁点注記について見てきた結果をまとめると次のようである。

### 【尾崎本】

- 仮名における濁点は、用例数の上では巻一との差が見られず、助詞「ば」に濁点の付かない例が目立つといった傾向も巻一と同様である。ガバマ行四段動詞連用形の下に付く助詞「で（て）」については、「上接動詞の音便の有無」と「助詞の濁点の有無」との関連を今後調査検討してみたい。
- 振り仮名の用例は巻一に引き続き少ない。これは尾崎本における振り仮名そのものが少ないことも多分に影響しているが、巻一ではあまり目立たなかった「濁音と考えられる振り仮名に濁点が付かない例」は巻二で増えているようである。

○漢字における濁点は、巻一に比べてかなり減っているが、「音読みで濁点が付かない語は日付、人名、官職名等がほとんどを占める」傾向は巻一と同様であった。また、濁点が付いている漢字は

- ①音と訓、呉音と漢音などで複数の読みが考えられるもの
- ②連濁により濁音化したと考えられるもの

の2通りのいずれかと考えられるものがほとんどである。音読みの語は語頭で①、語中で①②、訓読みの語は②でほぼ解釈できる。

### 【青洲本】

○全体的に尾崎本よりも濁点が多いことは巻一と同様であるが、巻一に比してその数はかなり減少している。

○仮名における濁点は、よく見ると「ほぼすべての濁音に濁点を付す」という巻一の方針とあまり変わっていないようであるが、助詞「が」など、濁点の付かない例が目立つ語も現れてきている。

○振り仮名においては、同じ語に濁点が付いたり付かなかったりする例が目立つようになる。

○漢字における濁点は、尾崎本とほぼ同様の傾向を示すが、濁点がなくても特に読みに迷わないであろう箇所が付くことも多い。マ行音とバ行音の交代に関する箇所への濁点がいくつか見られ、注目される。

巻一と比較すると濁点の数が減っていることは確かであるが、尾崎本には「仮名・振り仮名では高い割合で濁音に濁点を振る」「漢字では、他の読みが考えられる場合（連濁を含む）」という特徴が巻一に引き続き見られるようである。

青洲本は濁点の数が多いだけに（特に漢字について）そのような限定があてはまらないことも多いようである。もっとも「濁点がなくとも濁音で読む」とした語が本当に当時濁音であったかどうかについては軽率に断言できるものではなく、この他マ行音とバ行音の交代の問題など、様々な観点からの考察が可能であるし、また必要であろう。

以上をまずは調査結果及びその傾向の報告とし、次稿において問題点を詳しく見ていくこととしたい。

### 注

- 1) 拙論「平曲譜本の濁点注記—尾崎家本平家正節と青洲文庫本平家正節—」（『言語文化研究』5・平成22-3）
- 2) 「濁音で発音された可能性のある文字」については、現在濁音形で呼び慣わしている語、2本のうちどちらか一方に濁点が付されているもののほか、『日本古典文学

大系『平家物語』の振り仮名を参照して拾い上げた。当時において濁音で発音されていたかどうかはもちろん不明な部分が多く、また、同じ語形であっても常に清濁が一致するとは限らないのであるから、この用例（数）はあくまで参考として掲出したものである。

- 3) 卷一上の仮名においては同様の条件で尾崎本144例、青洲本8例を拾いあげた。本稿では卷二上下を対象としたため調査範囲が約2倍になっており、尾崎本の用例数はそれにほぼ比例するが、青洲本は約6倍の数値になっている。
- 4) 上接動詞の音便化によって、助詞「て」が濁音化して「で」となったもの、及び、もとの助詞「て」の両方を、以下、一括して「で（て）」と表記する。
- 5) 卷一上の振り仮名においては尾崎本で0例、青洲本で2例であった。今回の卷二上下の調査においてはそれぞれ16例、14例であって、少ないものではあるが、読みを示すことが目的であろう振り仮名の役割を両本ともにやや損なうようではある。
- 6) 卷一上の漢字においては尾崎本で394例、青洲本で150例を拾い上げた。今回の卷二上下の調査においてはそれぞれ765例、553例であって、青洲本での増加が著しい。ただし注2でも述べた如く、この用例数は「濁音の可能性のあった漢字」という確定できないものを対象としているため、参考として挙げるにとどめる。
- 7) 【語中1】に入れた「侍（さぶらふ）」は、もとからある「ぶ」ではなく、語頭の「さ」の部分が、上接語との複合による連濁を起して「ざぶらふ」となったと考えられるものである。

（おくむら かずこ・本学准教授）